

2020/11/01

ヨハネの福音書 講解メッセージ②②

『飛躍せよ』～自分の世界から飛び出せ～ヨハネ 7:25-36

✠ うわべで判断しない

「そこで、エルサレムのある人たちが言った。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。議員たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知ったのだろうか。けれども、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが来られるとき、それが、どこからか知っている者はだれもないのだ。」

(ヨハネ 7:25-27)

パリサイ人とイエス様とのやり取りを聞いていた群衆の中に「パリサイ人たちは、まさかイエスがキリストであると信じたわけではないだろうね。」とつぶやく人たちがいました。イエス様と同じ村から来た人々です。ガリラヤから仮庵の祭りに来た人々が「私たちは彼を知っている。キリストなら誰も知らないはずだから、彼はキリストではない。」と主張しているのです。

「イエスは、宮で教えておられるとき、大声をあげて言われた。「あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです。わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わしたからです。」そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである。」(ヨハネ 7:28-30)

イエス様が彼らに「自分はヨセフから出た者ではなく、天から来た。あなたがたはこの世の肉の関係を見ているだけで、霊的なものは何もわかっていない。」とお答えになったので、人々はイエス様を捕えようとしたが、誰もイエス様に手をかけた者はいませんでした。まだその時ではなかったからです。

このことから、私たちは、神の計画や目的を邪魔することは誰にもできないと知ることができます。神は、言われたことは必ず成し遂げられるのです。

「群衆のうちの多くの者がイエスを信じて言った。「キリストが来られても、この方がしているよりも多くのしるしを行われるだろうか。」(ヨハネ 7:31)

群衆の中には、イエス様に反感を持つ人もいましたが、信じる人も大勢いました。しかし、彼らがイエス様を信じたのは、しるし（奇跡）を見たからです。イエス様は、このような人々に、自分を任せることはなさいませんでした。それは、見ずして信じる者になってほしかったからです。だからこそ、イエス様は病をいやすたび、このことを黙っているように戒められたのです。

しるしを見て信じるということは、しるしがなくなったら信じないということです。実際、彼らの多くが、イエス様が奇跡を行わなくなったら、信じなくなりました。捕えられたイエス様に対して、「殺せ」「殺せ」と大合唱が起こり、人々は、十字架のイエス様に向かって「おまえがキリストなら自分を助けろ」とあざけたのです。

これが私たちの一般的な態度です。私たちは見えるものに左右されて生きているからです。見ずして信じるとは、うわべで判断しないということです。「納得したら信じよう」等、自分の価値基準で神をとらえようとするのではなく、神の言葉をただ信じるのが大切です。イエス様のうわべを見て信じるのではなく、見ずして信じる者となれば幸いです。

✠ 飛躍

「パリサイ人は、群衆がイエスについてこのようなことをひそひそと話しているのを耳にした。それで祭司長、パリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした。そこでイエスは言われた。「まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」そこで、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行行って、ギリシヤ人を教えるつもりではあるまい。『あなたがたはわたしを捜すが、見つからない』、また『わたしのいる所にあなたがたは来ることができない』とあの人と言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」（ヨハネ 7:32-36）

パリサイ人たちがイエス様を捕えようとしていましたが、イエス様は「あなたがたは私を捕えようとして捜すけれど、見つけれません。」と言いました。それを聞いた彼らは、イエス様は他国に離散したイスラエル人のところに行くつもりかと考えましたが、そうではなく、それは「天に行く」という意味です。

イエス様と彼らとの会話を振り返ってみると、特徴的なことは、イエス様が何を言っても人には理解できていないということです。それは、彼らが自分の枠組みから出ようとせず、自分の物差しの中でイエス様を理解しようとしたからです。

イエス様の言葉を理解しようとするのは間違っていない。しかし、理解できなかった時にどうするかが重要です。つまりいて文句を言うのなら、このパリサイ人たちと同じです。

「理解できなければ信じない。理解できれば信じる。」というのは、信仰ではありません。それでは、主役があなたで、神様は奴隷です。信仰の正しい態度、それは、「理解できないけれど、イエス様の言うことなら信じます。」というものです。

聖書が教える信仰と、理解できることとは、まったく別のものなのです。これを混同していることが、人類が初めから犯している間違いです。理性は、どんなにがんばっても神に到達することはできません。私たちが知ることができるのは、この世界のものだけです。それなのに、私たちの理性は経験を飛び越えて想像の世界に入っていこうとします。そして、様々なものを結び合わせて知ったような気持ちになり、安心するのです。しかし、それは自分の世界から一步も出てはいません。自分はすべてを知っており、自分の中で理解できることがすべてだと思っていると、このパリサイ人とイエス様のような会話になります。そして、自分の理解できないことを言う人に対して、「この人、おかしい。」と判断し、ついには「殺せ」とまで叫ぶのです。

私たちが苦しめているのは、自分の枠です。自分の中に安全地帯を作り、そこから出ようとしないことが問題なのです。自分で作った心の規定が自分を苦しめています。信仰とは、自分の物差しを捨て、自分という枠から飛び出すことです。これをキルケゴールは「飛躍」と言っています。

信仰とは飛躍することであって、理解して納得するものではありません。わからなかったら、「自分にはわからないけれど、神がそうおっしゃるなら信じます。」と信じること、これが私たちに必要な「飛躍」です。昔からのキリスト教の用語では、「飛躍」のことを「自分に死ぬ」「自我に死ぬ」と言います。「自我に死ぬ」とは、自分を捨てて飛び出すことができるかどうか、自分の枠組みを捨てられるかどうかということです。ここが問題なのです。

たとえば、人間とサルのコミュニケーションを考えてみましょう。人間が一生懸命言葉をかけ、何かを教えようとしたところで、サルはその十分の一も理解できません。サルにはサルの物の見方があり、その中でしかとらえることができないからです。その中で残されたコミュニケーションは、サルが人間の愛を信じるしかありません。

以前テレビのニュース番組で、浜辺に打ち上げられたトドを保護して海に戻す様子が放送されていました。トドは、人間が自分を助けようとしていることが理解できず、ずっと暴れ続けていました。もし、トドが人間を信じることができ、ゆだねることができれば、暴れることもなかったでしょう。

同様に、私たちも自分の枠を飛び出して、神を信じることができれば、どれだけ幸せでしょうか。あなたは、自分の枠の中で神を理解し、神を認めようとはしていないでしょうか。それでは、あなたが主権者になっています。人間にとって、主権者は神様であって、その方を信じるのが私たちの務めなのです。

このことを身にしみて知った人物がパウロです。パウロはイエス様を自分の枠組みで見て、偽預言者だと決めつけました。ところが、神によってこの方こそキリストだと教えられ、パウロは、自分の失敗は、人間的な標準でキリストを知ろうとしていたからだだと痛感しました。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

(Ⅱコリント 5:16)

これがパウロの決意です。これからは、キリストだけでなく、人に対しても、自分の枠組みで知ろうとはしないと心に決めたのです。これが飛躍です。神の言葉を信じるには飛躍が必要なのです。

✂️ どのように飛躍するか

私たちは、どこからどう飛躍すればよいのでしょうか。自分の枠から飛び出すとは、具体的にどうすることかを考えてみましょう。

1. 互いが良きものだと信じる

人は、例外なく、自分のことをだめなものだと思っています。自分の身なりを整え、人の目を気にするのは、自分が無条件で愛されるはずがないという前提があるからです。アダムとエバによって神が見えなくなって以来、すべての人は「自分はダメなもの」という認識を持っているのです。

しかし、神が私たちに訴え続けていることは、「あなたは無条件で愛される価値のあるものだ。」ということです。人間的標準で見るとダメなものかもしれませんが、それは真実な評価ではありません。

なぜ「あなたは良きもの」と言えるのでしょうか。それは、私たちの土台はキリストだからです。建造物では基礎が重要です。どんなに立派な建物でも、基礎がきちんとしてなければ壊れてしまいます。聖書は、私たちはキリストの上に建てられている建物であり、私たちの土台はキリストであると教えています。ですから、私たちは無条件で良きものなのです。

神は私たちをお造りになったとき、「非常に良い」と言われ、私たちのことを「高価で尊い」と言っておられます。神は、私たちの価値をうわべで見たりしないからです。

人はうわべしか見えませんが、このうわべはやがて朽ちてなくなるものです。しかし、私たちの内なる人は日々新しくされていると聖書は教えています。

2. 罪は病気だということを知る

人は、罪を犯す者はダメな者だと思い、お互いに裁き合います。ですから、ダメな自分を見ると自分は神に裁かれてしまうと思うのです。しかし、神は、罪は死がもたらした病気だと考えています。神は、病をいやすのと同様に、罪をいやしてくださるのです。

このことを信じないで、自分の枠の中で理解しようとした結果、人は罪には罰があるものだと思い込んでいます。この世は行いで人を判断しますから、神もそのように人を見るのだろうと勝手に思い込んでいるのです。

しかし、神様は罪をさばくのではなく、あわれむお方です。それが十字架です。

主はいやし主です。自分を責めることも、人を責めることもやめて、神様にいやしを求めましょう。イエス・キリストの言葉を信じて、重荷を差し出して生きましょう。

3. 「必ず助ける」という約束を信じる

神様は、決してあなたの問題を放置しません。必ず助けると約束しておられます。あなたは、この約束を信じますか。

問題にぶつかっても、どんなに困難でも、神の約束があります。あなたは、「それを信じます」と飛び出すことができるでしょうか。

神様は、「私の言ったことは必ず成就するし、必ず助ける。」と約束しておられます。あなたを苦しめているのはあなたの枠組みであり、そこから出ない限り、真実はなく、平安を手にすることはできません。

「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に立っていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」(Ⅱコリント 4:8-9)

問題にぶつかったら、この約束を信じて飛び出しましょう。神が助けてくださるからです。これはあなたへの約束です。問題にぶつかるのは、この約束を信じるチャンスです。

私たちは、人間的な標準の中にとどまってあきらめることが信仰だと思ふときがあります。そうではなく、聖書の言葉を信じて飛び出してほしいのです。人間的標準から飛び出し、神の言葉を信じましょう。

私たちが祈るのは、自分の枠から飛び出すためです。神の言葉を信じられるようになるためです。「助けてください。この罪人をあわれんでください」と祈ることを通して、本当に神と交わることができるのです。本当の交わりとは、自分を捨て、神の言葉を素直に信じることです。自分に理解できないことにぶつかったときこそ、あなたが飛躍するチャンスです。